



住吉名勝圖會一

ル 4
4795
1



4795
1

住吉名勝
會圖



名所佳境乃世可
多如草木之
法海也何足記
志母ら海紀ふら海

名勝國絵也車馬杖
履清心以心如付
了凡席法あいに不縁勝
函環乃の心よ草

亭二

之公乃の心よ草
中塊以或ハ古今
事蹟は海原に集り
顔人強カ如付

たぐひなき威風凛々
近濃の墨妙はあ
けく寂庵詠吟の
便と可成む橋本に

序三

ちのちあつて岸の姫松
りりあいにあつた
とあつたあつた
あつたあつた

寛政七奉土への

藤波三位寛忠郷

总抄主人書

序の四

凡例

- 此書は住吉大小の祭事年中乃行事記悉く記して他邦遠境の人に當社祭事の多き神事の美なるを志すべし
- 右祭禮神幸壯大成との圖をあつて小なるものも事記し之を圖を除く
- 祭禮の圖は神殿を執りしもあり宿院或は舞臺等々を行きしり其祭事ハ其所を記し之を圖とせん
- 初巻本社乃全圖照合し見ゆ
- 年中小祭の行事といふありては社役人等乃より執行の故實をハ事無くし之れハ社役人等よりし之を次編に備へて事記すべし
- 住吉街道の寺院社頭ハちかきものあるといふも元來住吉乃名所を集し書成故に他の寺社におちてハ圖をせし

のこと其車馬をくわくせぬ
 ○巻中の繪を現在を画く有過ぎぬ画く有文よりて繪く有
 古よりて画く有画み寄て画く有抑現在よりたゞ
 住吉本社の園より街道の敷丁のゆき足をはり過ぎ去り
 車返りの櫻頭家卿安倍野合戦の園を云文に字あり
 味茅菴の二休和尚文徳帝住吉幸行のときは日古より
 するはほりより里はを行长居り里の名を頼まん
 等の園を云陰よりて画くは俗の所謂繪を云言てさ
 かりき車もおまゝらく急ぎさゝるゝ娘をく画さな
 け是より繪の本意に祭事の内各級の黄衣白衣お
 くる物ももくを級を画くは繪やうて潤色をかり競馬
 早乙女の顔かり巻を開く人はさしつゝ見て用捨を下
 ○住吉社よりある寺社の外村里舊跡一草もくはは
 出まきよれらるは次編を俟て合せ見よ

住吉名勝圖會卷之一目錄

- | | |
|------------|----------|
| 神功皇后三韓征伐之圖 | 御前崎之圖 |
| 住吉本社之圖 | 神宮寺之圖 |
| 大海神社之圖 | 奥天神之圖 |
| 住吉街道之圖 | 今宮札之辻之圖 |
| 景時詠和歌圖 | 東之大鳥井之圖 |
| 天下茶屋之圖 | 三文字屋座敷之圖 |

以上

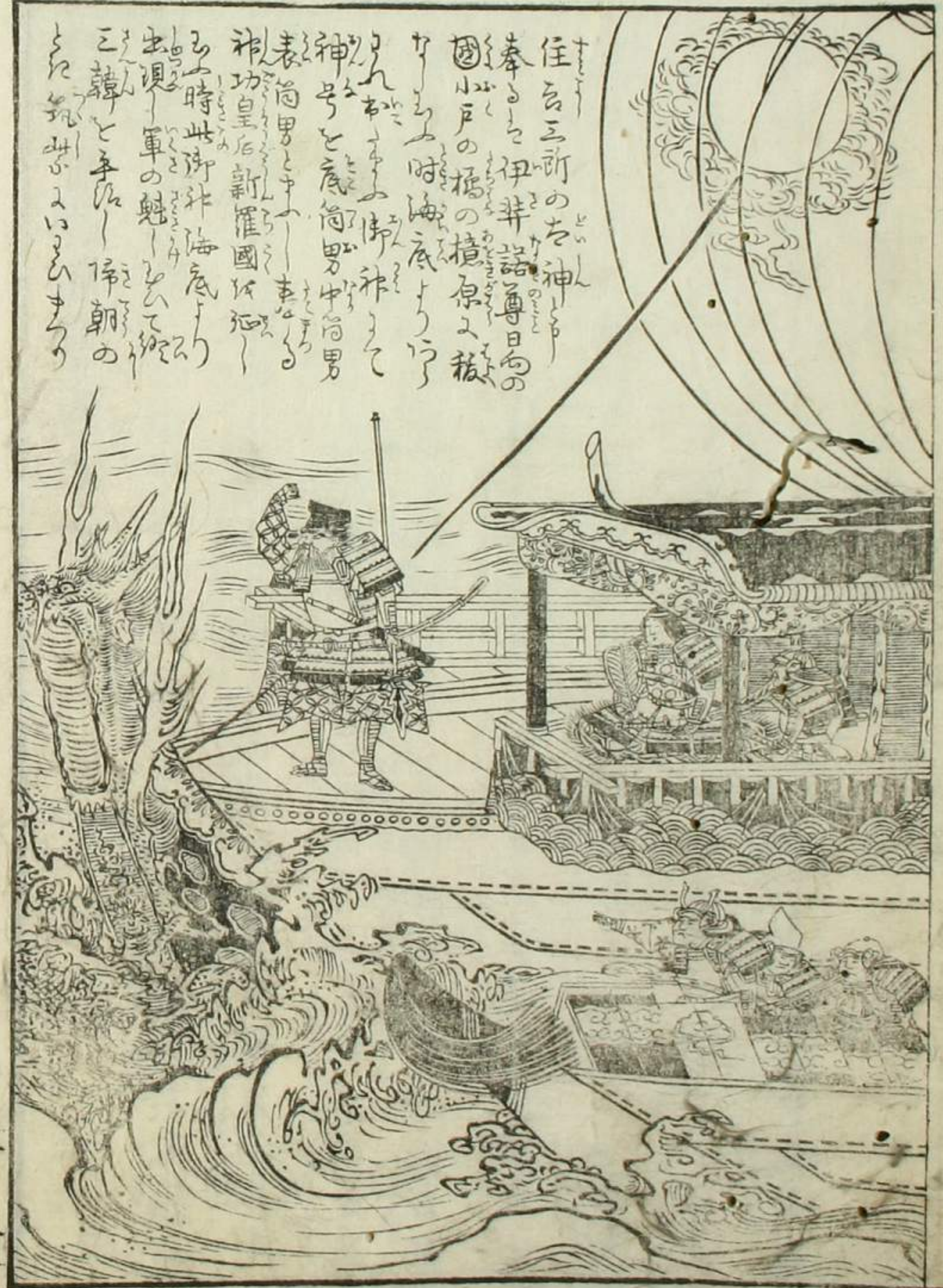
南郊三十里探勝
愧余癡欲謁歌神
廟徘徊謾賦詩

筱應道



住吉名勝圖會卷之一

日本書記第一曰伊弉諾尊既還乃追悔曰吾前到於不須也
凶目汚穢之處故當滌去吾身之濁穢則往至筑紫日向小戸
橘之檍原而拔除焉遂將盪滌身之所汚乃興言曰上瀨是甚
疾下瀨是太弱便濯中之瀨也因以生神號曰八十在津日袖
次將矯其狂而生神号曰神直日神次太直日神又沉濯於海
底因以生神號曰底津少童命次底筒男命又潛濯於潮中因
以生神號曰中津少童命次中筒男命又浮濯於潮上因以生
神號表津少童命次表筒男命凡有九神矣其底筒男命中筒
男命表筒男命是住吉大神矣



と其海神皇居
道一海と吾和魂の
津の津中倉の長峽
居之とて往來乃
船と見人とのい
すの海の津
鎮をの神
四社の神
神功皇后
保るあり奉る



旧事紀曰其底津少童命津少童命表津少童命此二神者
阿曇連等齊祠筑紫期香神底筒男命中筒男命表筒男命此
三神者津守連等齊祠住吉三所前神
古事紀曰底筒之男命中筒之男神上筒之男命三柱神者墨
江之三前本神也

同卷曰神功皇后以其御杖衝立新羅國主之門即以墨江大
神之荒魂為國守神而祭鎮還渡也

神書鈔云住吉大神其荒魂在筑紫之小戸和魂者神功皇后
征三韓之時陰騭玉體而顯坐攝州
風土紀曰所以稱住吉者昔息長足比賣天皇世住吉大神現

出而巡行天下覓可住國時到於沼名掠長岡之前乃謂斯實
可住之國遂讚稱之云真住吉國乃是定神社今俗略之直稱
須美乃叡

延喜式卷第三曰凡諸國神社隨破修理但攝津國住吉下總
國香取常陸國鹿嶋等神社正殿廿年一度改造其料使用神
稅如無神稅即充正稅

續日本後記卷第八曰仁明帝承仁六年八月己巳攝津國住
吉神祈船舶歸着

東鑑云治承四年八月十六日丙申自昨日雨降終日不休止
為明日合戰無為被始行御祈禱住吉小太夫昌長奉任天胃

住吉濱邊之圖

風雅集 後言

住吉の

浦乃

深きよみ

日や

もよそ

東涯

昔時攝都勝

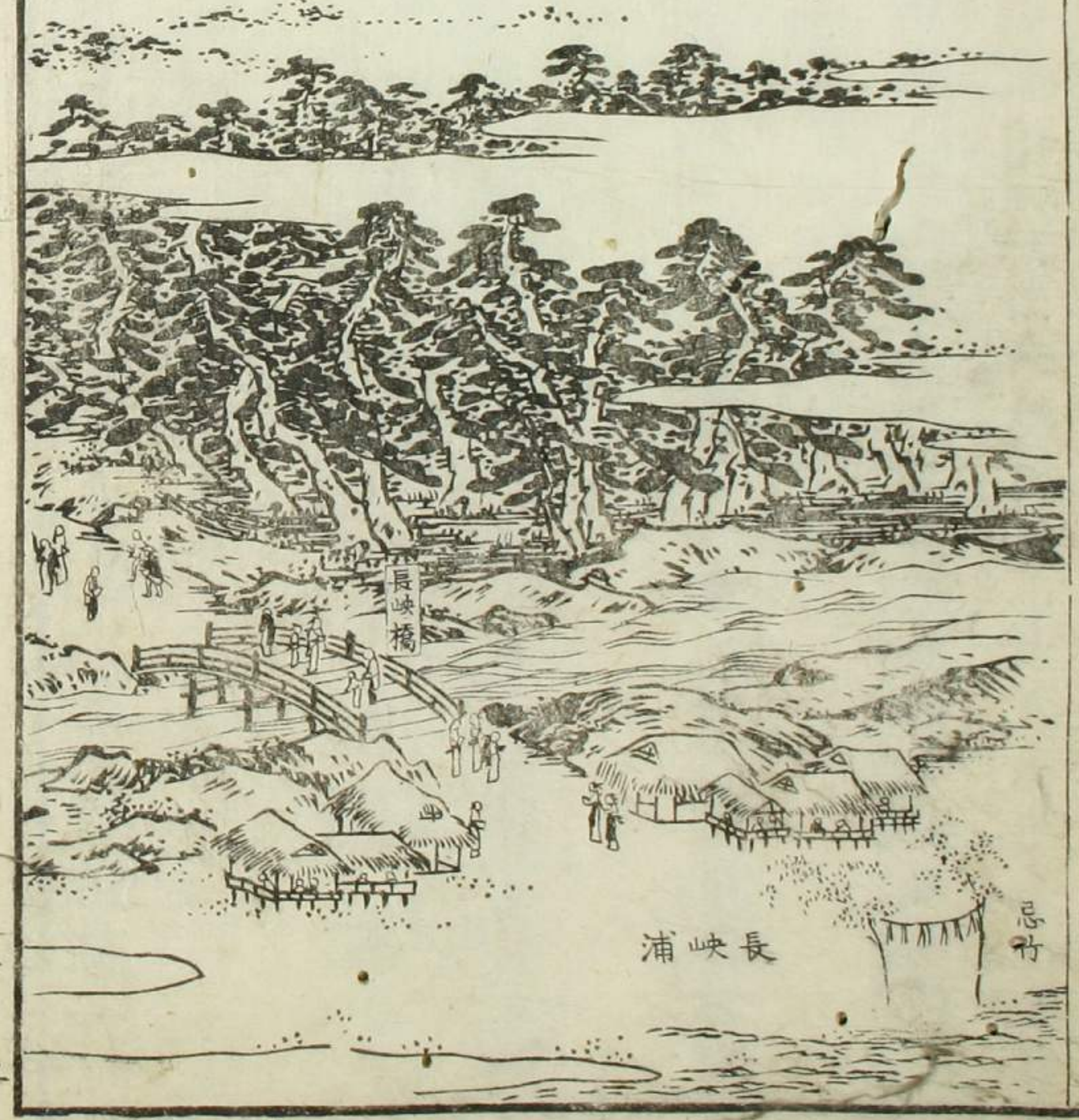
今遊住吉濱

波浸紅日湧

樹接白雲鄰

左臂控南地

前頭際北津



忌行

浦峽長

長峽橋

一ノ三

漁郎沽海賈
 行客祭江神
 夙抱遠遊志
 每羞株守身
 何浮滄海上
 快活祛胸塵

福

あ

年瑞

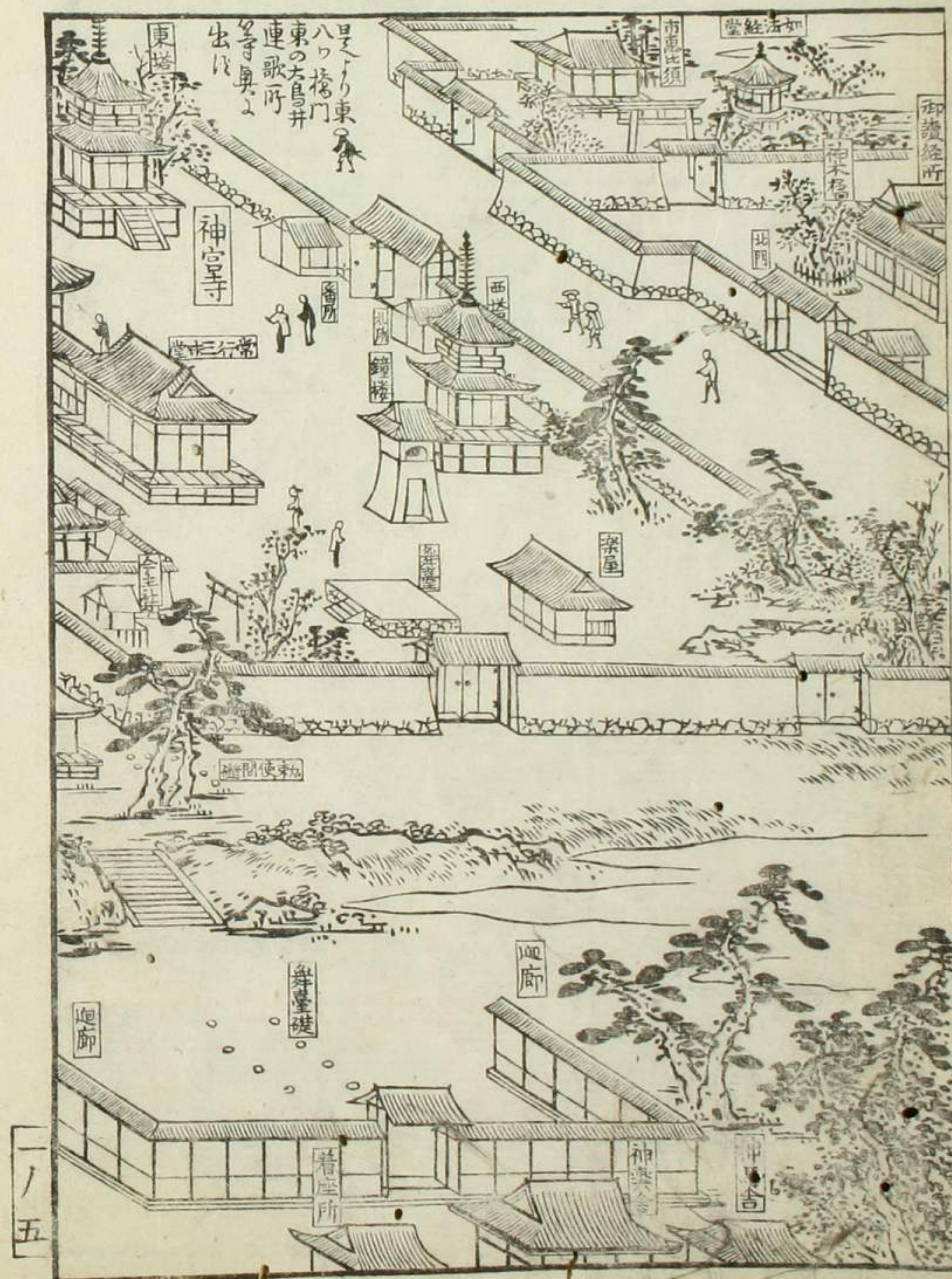
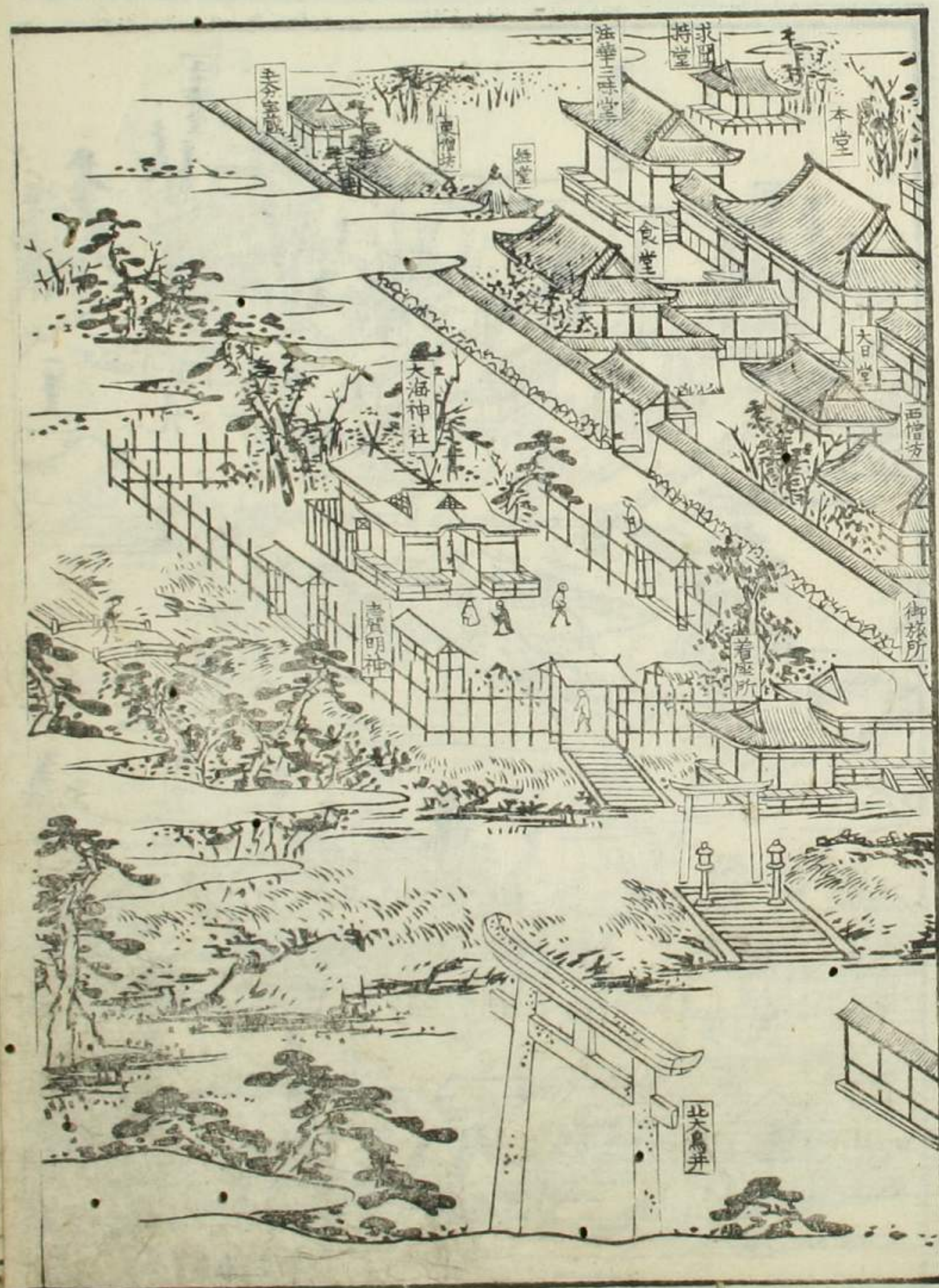
あ

宗祇

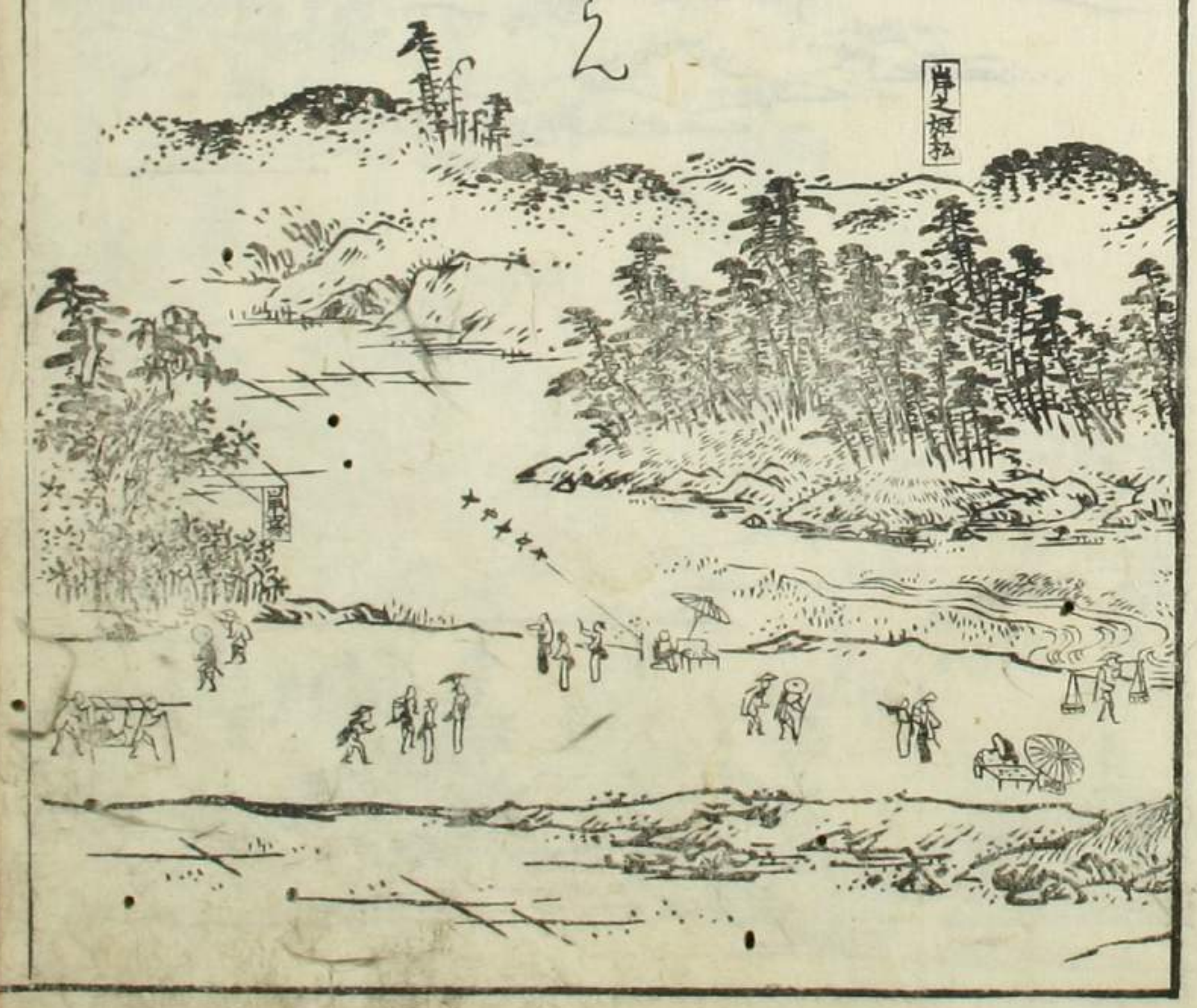
西大鳥井
 馬場先筋



内川



或は松よ云姫松
 女松をりをす
 又小松を姫とい
 と小松がりとい
 さいとい
 松の山乃姫
 いく代河なえん
 のおのり見ま
 松の山乃姫
 意の詞なり
 姫の山乃姫



位よりと
 宗養
 海の雲
 揺れて
 来山
 全
 見よ半輪の
 の雲



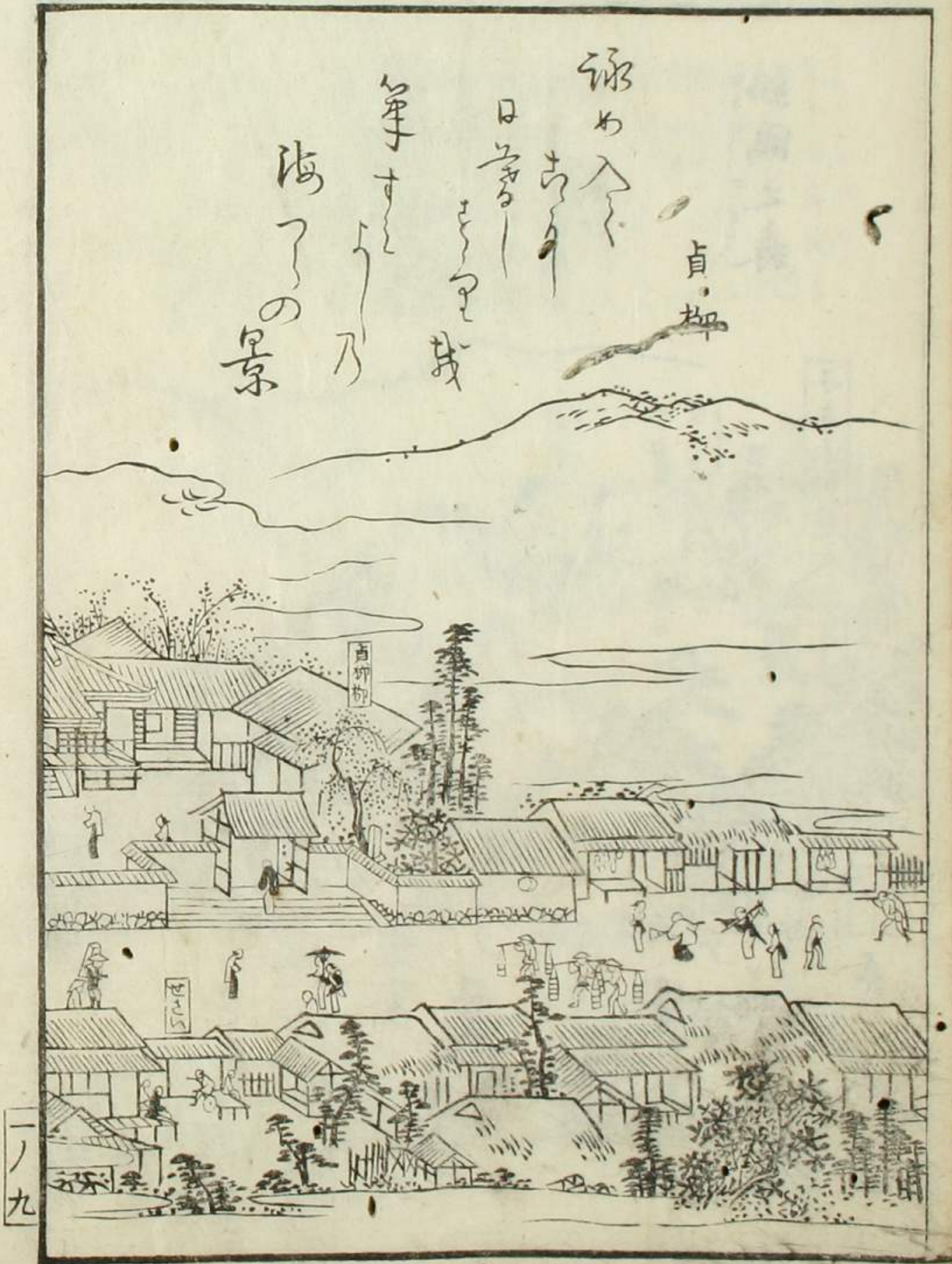
紹鷗之森

紹鷗森天満宮
鳥井の額寶鏡
寺乃御宸筆
御本帝天下
茶屋小兵衛が
家蔵む

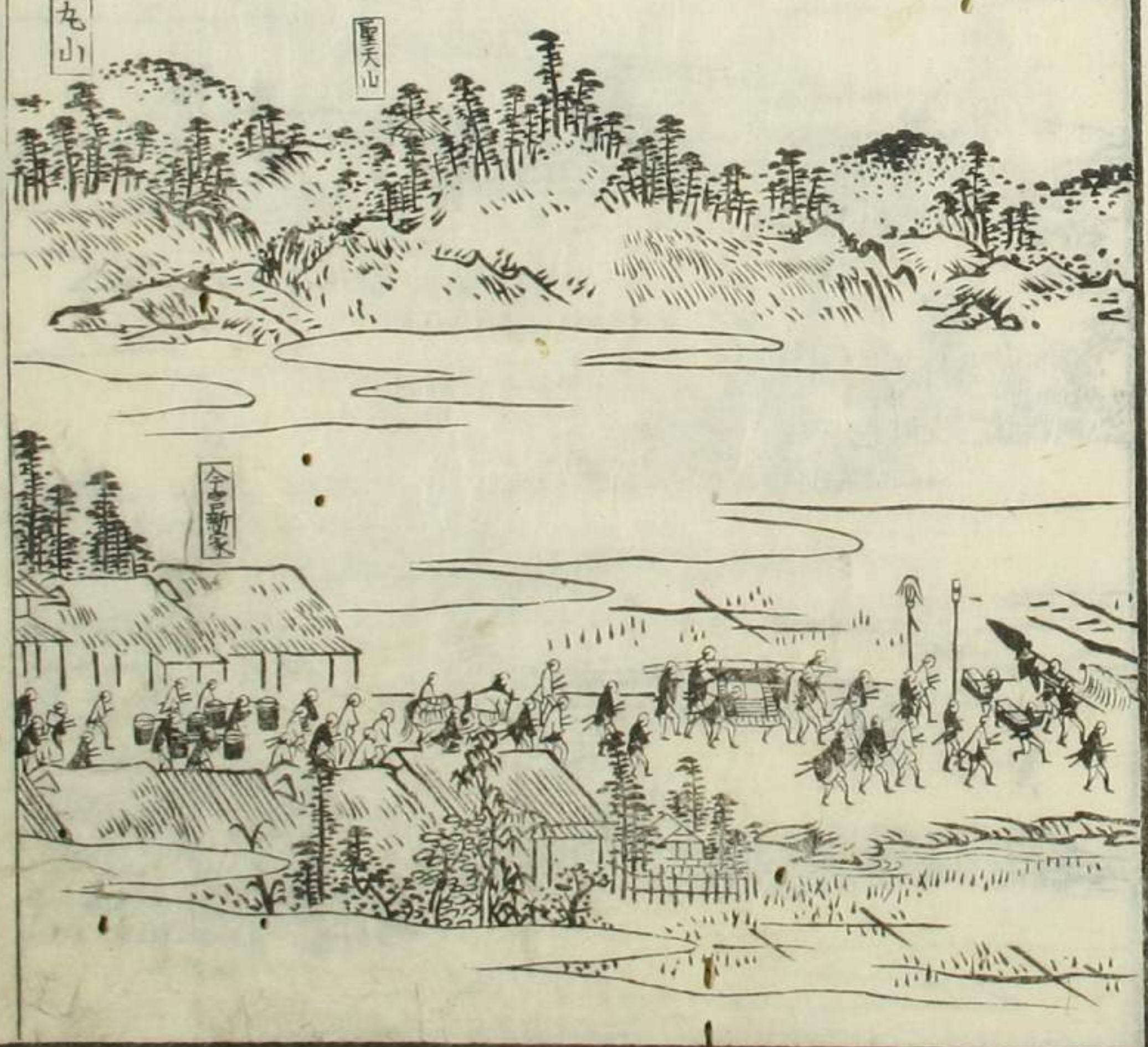


天下茶屋村と
昔豊巨秀吉公
堀政所久御前
時此茶店と
御体足しあひ
て所茶をき
下茶屋の各
紹鷗の街と
今も紹鷗の森
として當村あり
其時の茶器を
殿下へ御の亭今
猶存りり園を
後編に出ん



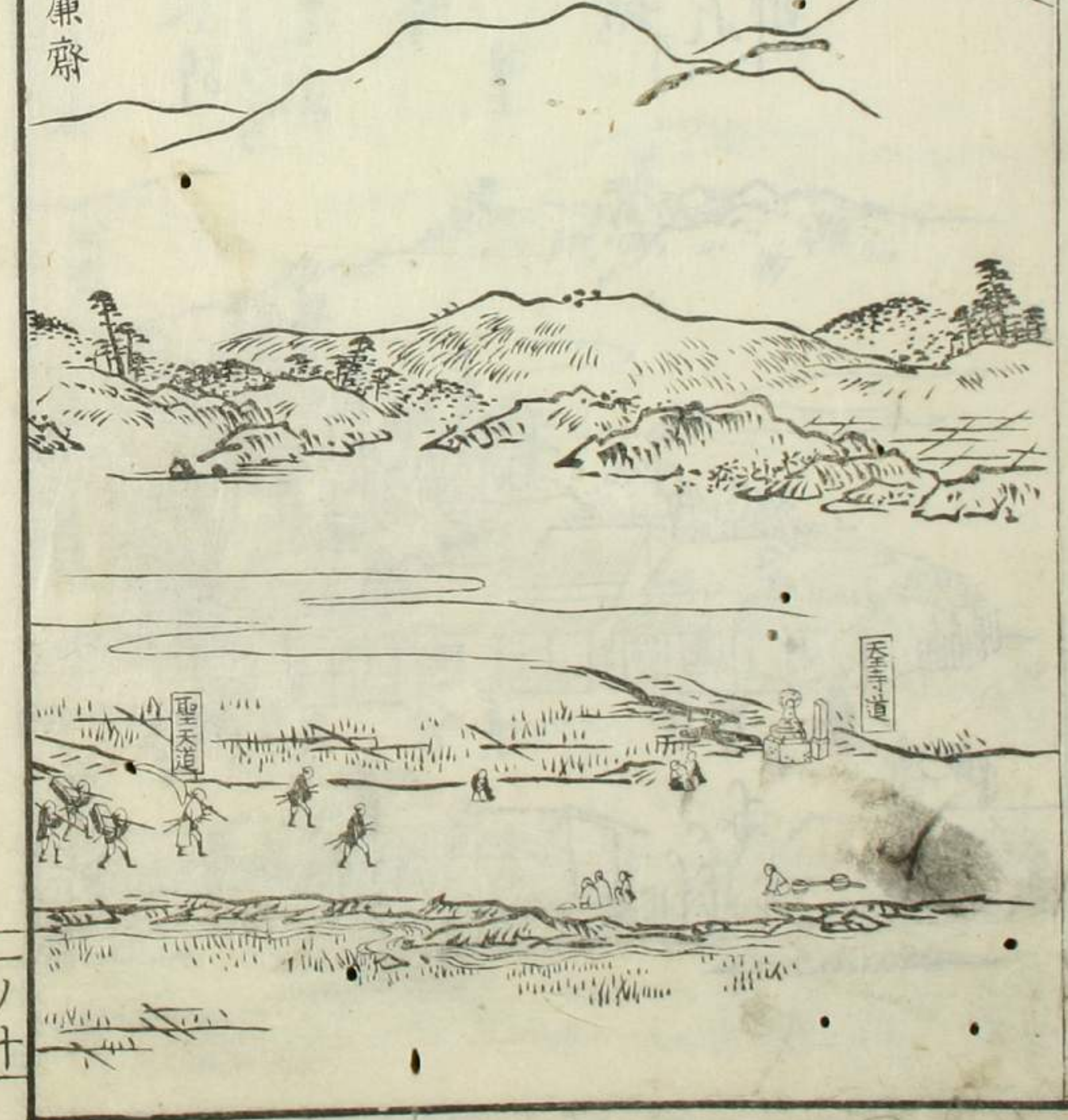


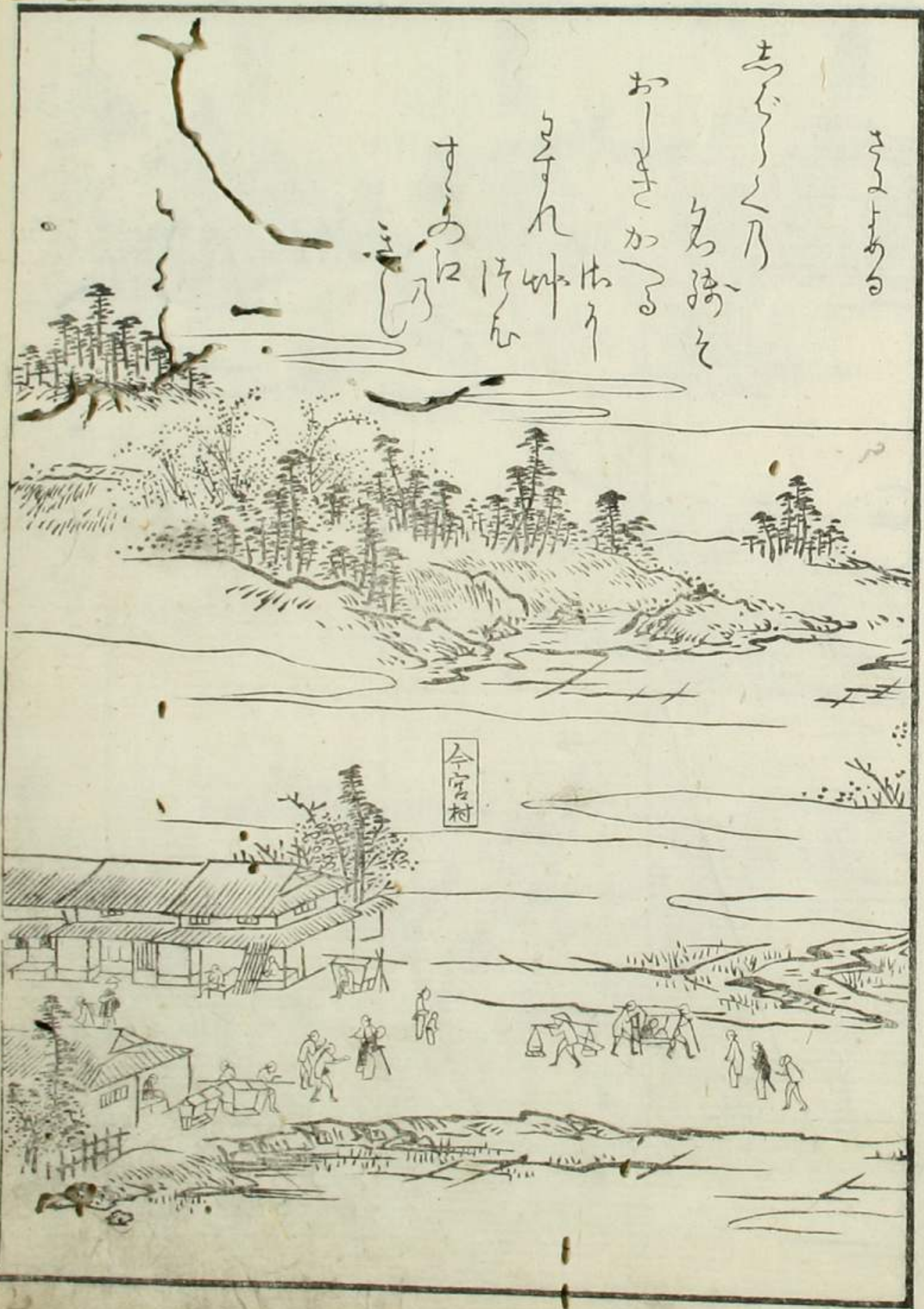
道人傲自然菴
 故事用茶造於
 墨江岸松樹林
 中予亦一日與
 焉
 曾聞自在古風流
 茶味禪心一擔頭
 不料尋君松樹下
 風流自在此中遊
 城南遠赴蒼龍
 小昂掛松汲石泉
 鴻漸由來誰得似
 紹鴉古跡未全懸
 掃山懸古高下捐
 待來人汲得清瀆
 水未曾染世塵



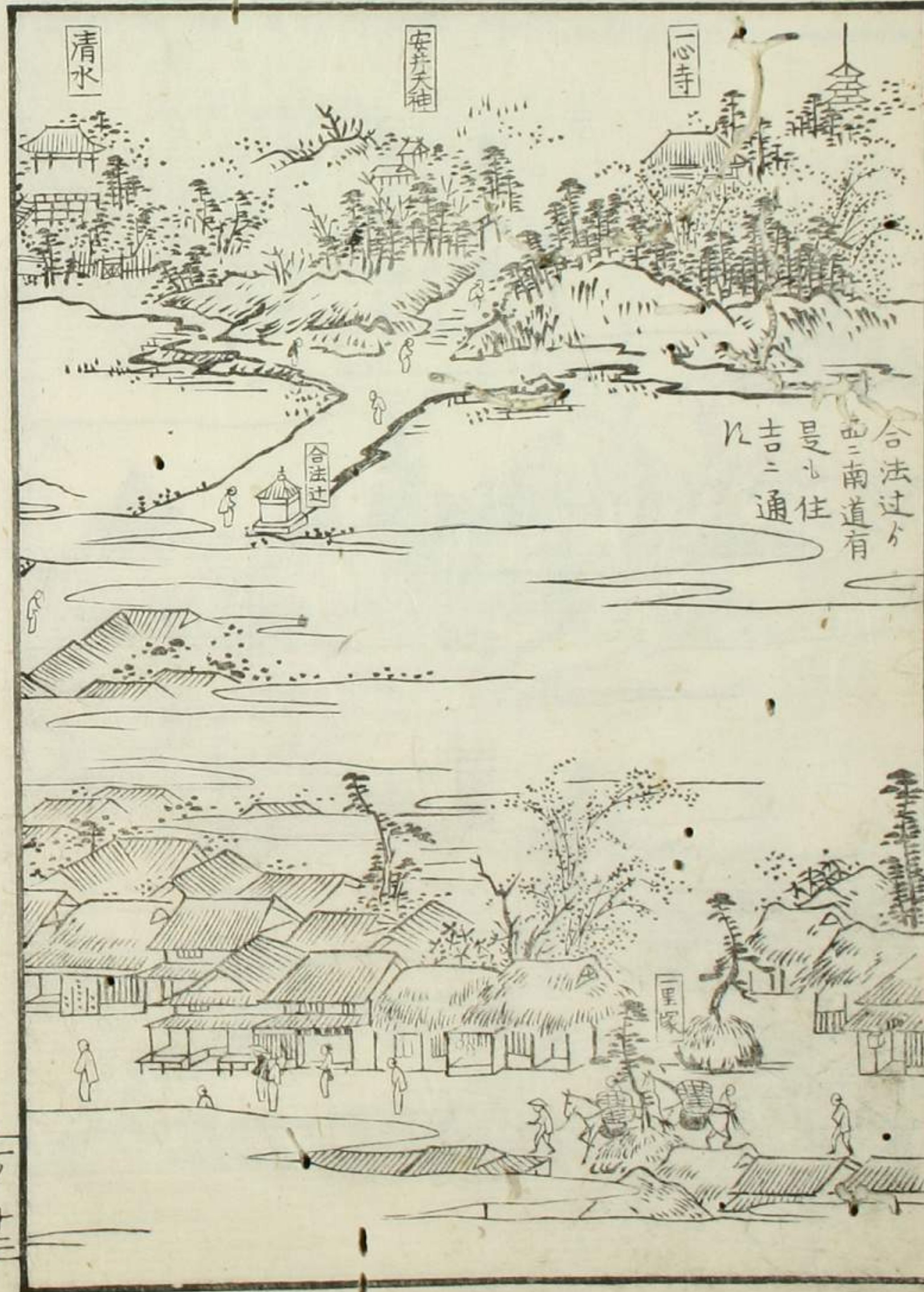
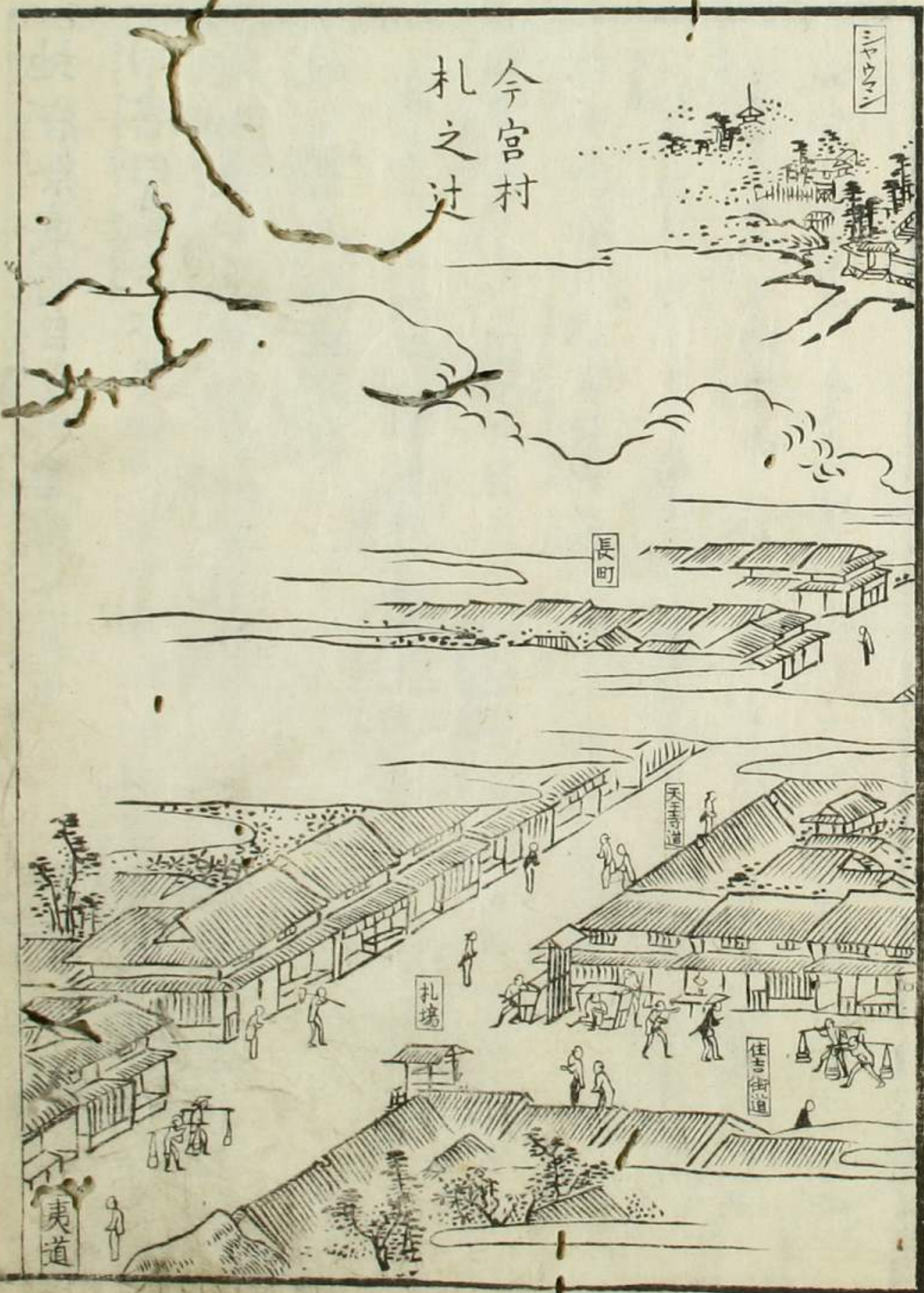
天明壬寅の禪
 業火の茶の會
 傳一わりの道
 生廉齋道人
 好人もとある
 何れもとある
 まらうもとある
 おなましほし
 印りもとある
 あんとかとある
 北海三島
 あつた兄弟茶
 人觀心もとある
 かゝるもとある
 うゝもとある
 くも興ありや

壬寅初春廉齋





應廉齋道人
 招至墨江古
 松岸席上觀
 山道人詩
 次其韻呈主
 人
 應道
 墨江東地岸設
 席迎同人藉艸
 燒松子風清王
 屑塵
 掛瓢為照導曲
 徑不遲人清風
 林下茗總無一
 默塵
 柴火乃茶を
 志すはるかる



地府祭武衛自御鏡授給昌長

同書曰建久六年四月廿七日壬午將軍家以梶原平三景時
為御使令奉幣住吉社給被奉神馬今夕景時參着社頭註和
歌一首於釣殿之柱

我君乃日向の駒を引連れてり未きことさうわさせ

同書曰承元三年七月五日丙申將軍家依御夢想被奉二十

首御詠歌於住吉社内藤右馬允知親為御使

位の江乃いつくもゆりの神とて行もくも船もかん

片々さや玉のみもの神やあまがひてはるふ茶のこま

うつしと沸きあゆむれはるの神のまはねの千鳥



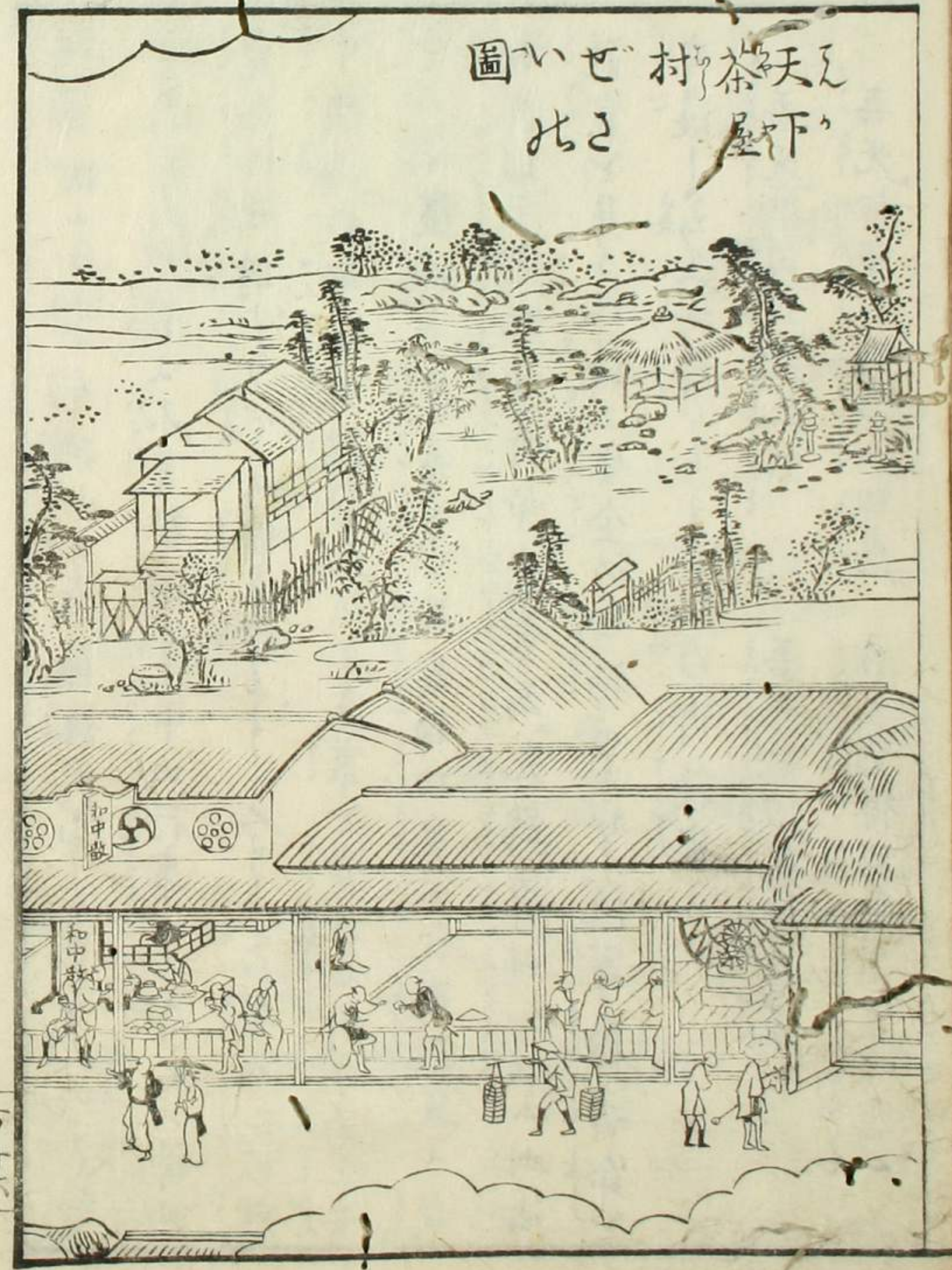
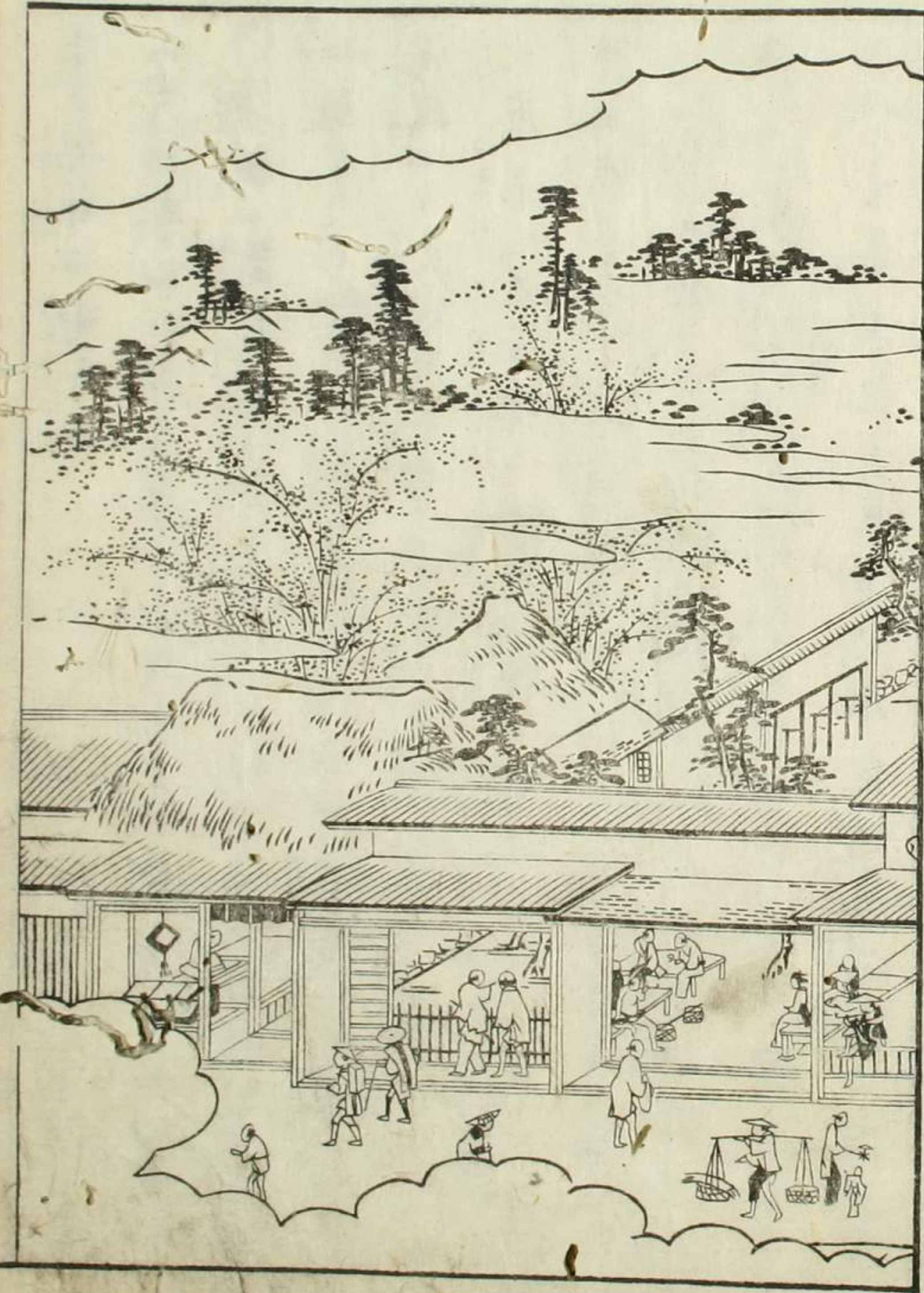
釣殿

今墨江山とよ山の下
墨江殿にて神籠の
と齋殿有其南よは
こゝ釣殿なり
古記に見



東之
大鳥
井
是より
東、三町余浄寺
十八町日邊庄
南、三町余津守寺
五町余若松社
西、直、大海神社
神宮寺
市恵比須社
住吉大神北之門
北、直、安部野街道

我寄附する事今猶少うは神徳のつらきま人のよく勿
 とろなれば爰も不言祭禮年中の行事も多うは神功
 皇后の御時より今又傳り侍りよき事と當社及祈り海上安
 中渡海の船舶風波のふひなき事と當社及祈り海上安
 全の守護神と崇奉も宜哉神功皇后記御詭宣し我
 和竟服玉身而守壽命荒竟為先鋒導師船云云此御
 詭宣と見るに海上安全の御神のなげ軍陳壽命と
 守護しよは神かりまこと一乃御詭宣し
 吾无躬以正遠為躬
 吾无智惠以忠本為智惠
 吾无德以慈悲為德
 吾无奇得以無事為奇得



まゝ明神の御奇也

いよの國宇和の郡乃魚すも我のやいかなんは神くすも

○清輔と奥義抄袋草帛等々住吉四の神殿を玉津島

明神なりとあり是を和奇三神の御事より附せむ

詭成下史和奇三神ももるを住吉の三神是なり

人磨赤人衣通姫と和奇三聖と稱し奉る四の神殿と

姫神成るが故に此説はよけりすも神社者

よ云住吉第一之宮天照太神第二之宮宇佐明神田霧

第三之宮底筒男第四之宮神功皇后なりと見たり

されども舊事記古事記日本記延喜式等の旧きま

すかつ見たいすの宣命なり住吉三所太明神と
ありて四の神殿乃清事之見侍は何れ其説より
く平き事とあり

○栢津の國住吉郡住吉乃御社も奉るを西を滄海漫

漫して霧みゆる船舶の淡路明石乃津と見かく

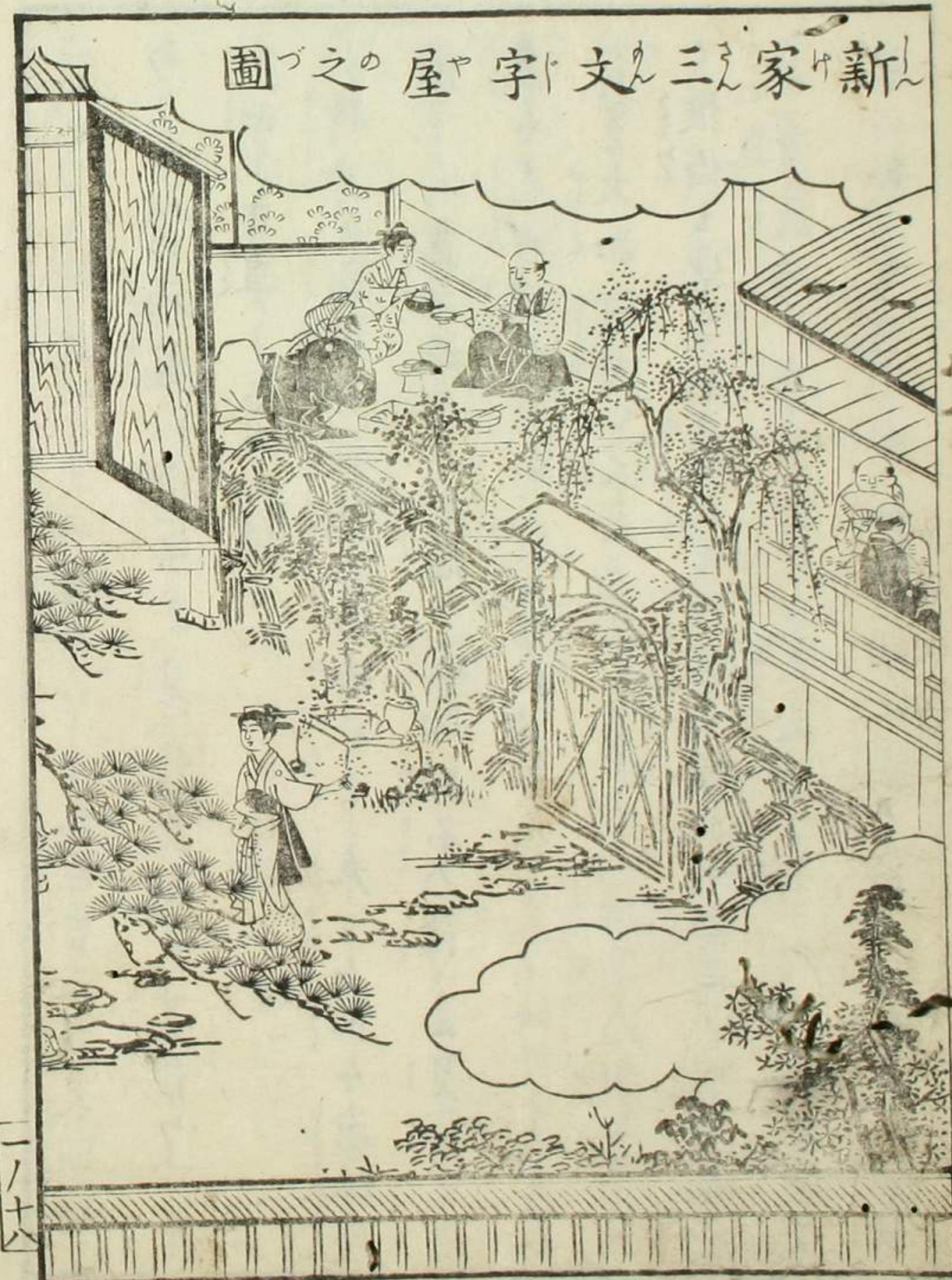
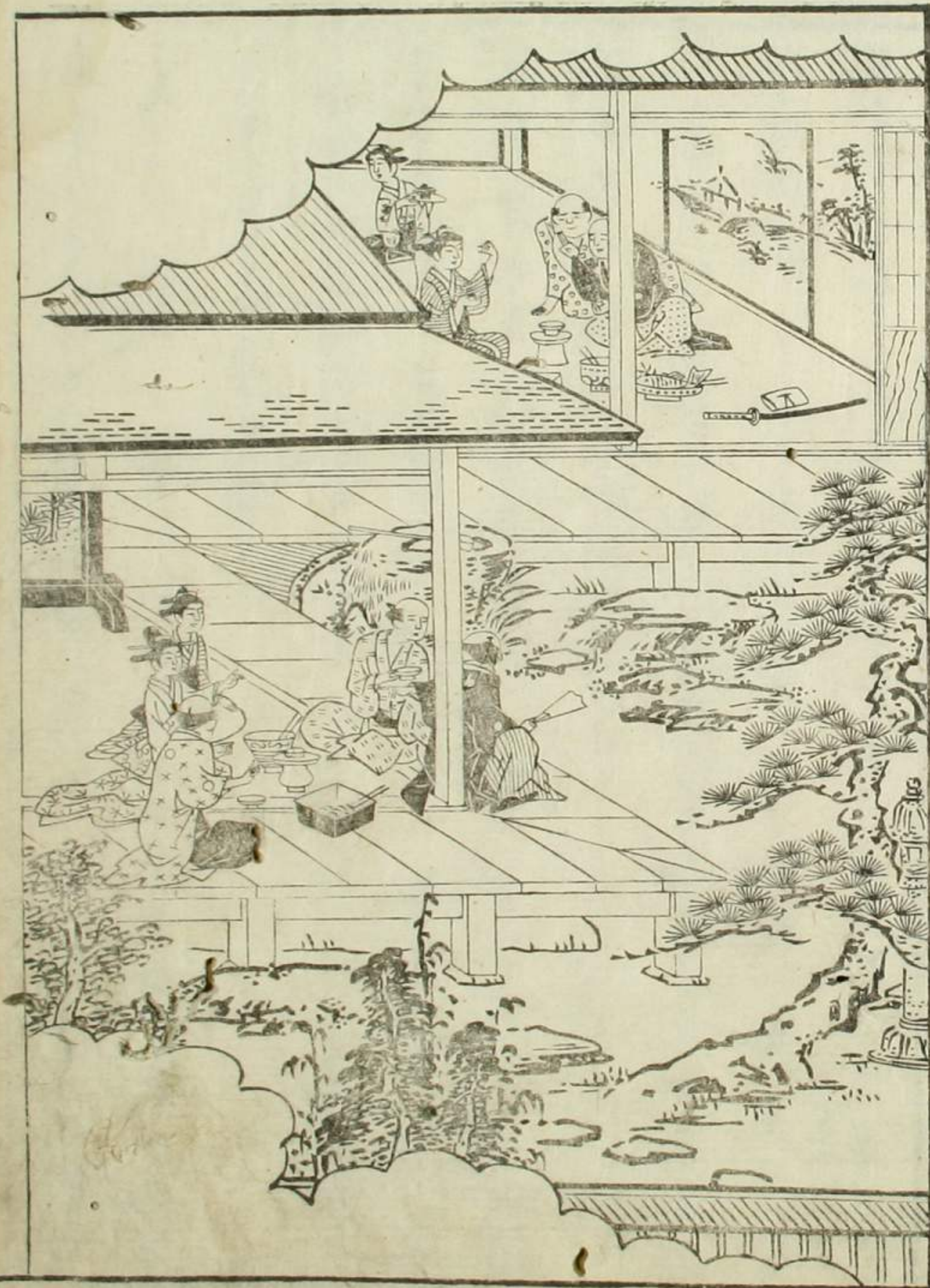
東を高山嶽々として金峯かつき乃のくはうらよ

たき大和河内をすみとらうとて掘泉乃咽喉より

て惟伯もゆきふ農民も往來に土地に産る物の胡子

花壺蘆花とよとまぐり又忘州忘見なり和奇者

流の細る事としておぼらけに語りあはるも昔へて



衣なり其外兜蓋鳥銃銀朱 白粉 鬼せん魚の
ろくや割刀を堺の銘みらぶるくき里野の油を
やき事とて夫本集も

侍月や遠里小燈の油賣つきいと軽の皮さうの夜
其和芥さきと麦葷やと其數多し湖夕晴嵐 奥天神
秋月 津守寺晚鐘 中村夜雨 戎島歸帆 大仙陵暮雪
海船夕照 御田落馬 此里の俗住吉の八景とて四時の
なめは愛み盡に久くかりぬと詠せし岸の姫松と
今の街道よりが東とて方八丁が泡松の林とありて
残るどむりの事も抄ひ出されて抄いおれ大鳥井より

西の方馬場の松原の五丁み余り高きとて長峽の橋と
よとせる内川かん浪華津と續きて爰よ詣る川舟の所せ
く引なしたる系竹の音絶る際なく濱邊とてあや
の家居立は糸蛤の美ゆきのよも此所の名物とて爰
よ詣る人賞し侍り社頭とて國より献し奉る石と
うらうらやがうらうら立御燈の光り 柔然と照りて松
風浪の音もみまひて實は津の國の一乃宮と崇め奉る
もむかりとやめぬ

住吉名勝圖會卷之一終

